

ペルー南海岸エストゥディアンテ遺跡発掘調査概報

松本雄一（山形大学）

ホルヘ・オラーノ・カナレス（パリ第一大学）

坂井正人（山形大学）

発表要旨

ペルー南海岸、インヘニオ河谷下流域に位置するエストゥディアンテ遺跡では、自然の丘陵をテラス状に整形した建築が 4 ヘクタールにわたって広がっている。同遺跡はその規模の大きさから考古学者の注目を集めていたが、発表者たちが 2017 年に発掘調査を実施するまで発掘調査は行われてこなかった。

これまでの唯一といってよい調査データは、アメリカ合衆国の考古学者であるヘレイン・シルバーマンによって 1988 年から 1989 年にかけて行われたインヘニオ河谷の踏査によるデータである。彼女は地表面で確認可能な建築と土器の様式編年にもとづいて、エストゥディアンテ遺跡をナスカ早期（紀元前 260-紀元後 80 年）の遺跡であると論じ、エリート層の住居や公共的空間などが存在する可能性を指摘した。階層化した社会組織を想定するナスカ早期のイメージは、現在のナスカ文化研究において広く受け入れられているといっている。

2017 年に行われた調査では、このようなシルバーマンによって提示された仮説を発掘調査のデータによって検証すると同時に、絶対年代に基づく遺跡編年を確立することを目指した。結果、エストゥディアンテ遺跡はシルバーマンの想定と合致するナスカ早期のみに機能したわけではなく、実際には同時期に加えて、後期中間期のイカ期（紀元後 1180-1560 年）の建築が広範囲に分布していることが分かった。さらに、彼女がエリート層の住居とみなした遺構の多くはイカ期に対応することが判明した。

本発表では、これまでの研究の蓄積が少ないナスカ早期に焦点を当て、主に編年と社会組織の問題を論じることとする。前者に関しては、絶対年代と建築の対応関係を検討し、両者に対応する土器を様式的に分析することで、ナスカ早期に対応する土器様式をより明確な形で定義する。後者に関しては、遺跡内の異なる地区の発掘データを比較し、階層化の証拠の有無を検討し、ナスカ早期における社会組織に関して考察する。新たなデータを上記の視点から総括し、エストゥディアンテ遺跡のデータがペルー南海岸の先スペイン期社会の理解にどのように寄与するかを論じることとする。

ペルー北部とエクアドル南部における形成期の編年と地域間交流

山本睦（山形大学）

フアン・パブロ・バルガス（エクアドル・クエンカ市考古課）

オスカル・アリアス（ペルー国立サン・マルコス大学）

発表要旨

アンデス考古学では、土器の導入や土器をはじめとした考古資料の様式的類似性、あるいは暖流系の貝の搬入などから、ペルー北部とエクアドル南部において、形成期あるいはそれ以前から、交流が存在したと考えられてきた。しかし、ペルー最北部を境に、神殿の有無や土器様式などにおいて明確な差異も存在する。そのため、ペルー最北部は、中央アンデスという文化圏の周縁、かつ中央アンデスと北部アンデスという両文化圏の境界として位置づけられてきた。また、それと同時に、ペルー最北部では両文化圏の諸社会と交流をもちながらも、独自の展開をとげた社会が存在したことが推測されてきた。

発表者らは、2005年からペルー最北部のワンカバンバ川流域を対象に、とくにインガタンボ遺跡で継続的な調査を実施してきた。その結果、地域間交流が活性化する形成期中期（前1200年-前800年）から形成期後期（前800年-前550年）において、インガタンボに大きな社会変化が生じたことを明らかにした。しかし、日本のアンデス調査団によるデータの充実が著しいペルー北部と比べて、エクアドル南部の編年には不確かな点も多く、両地域間の関係は、詳細に検討することができなかった。

そこで、発表者らは、2019年にエクアドル南部のセロ・ナリオ遺跡とロマ・デ・ピンシユル遺跡で発掘調査を実施した。その結果、先行研究では形成期中期から後期にかけて、エクアドル南部とペルー北部で交流が活発化したと考えられてきたが、その編年的位置づけには再考の余地があることが明らかとなった。

以上のことをふまえて、本発表ではまず、ペルーとエクアドルでの調査成果を総括し、両地域の編年と、先行研究で地域間交流の根拠とされてきた土器の様式的類似性について整理する。そのうえで、両地域間の交流のあり方について考察し、従来想定されてきたものとは、異なる地域間交流のあり方が存在する可能性を指摘する。

なお、ペルーとエクアドルでは用いられる編年が異なるが、本発表では主として日本調査団による中央アンデスの編年を使用する。

ペルー北部高地、カピーヤ遺跡の土器編年

中川渚（国立民族学博物館）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

発表要旨

本発表では、ペルー北部高地のカピーヤ遺跡出土土器を分析し、土器編年について考察した結果を報告する。パコパンパ遺跡は、ペルー北部高地に位置する形成期の祭祀センターであるが、その周囲にも同時期の遺跡が複数存在し、それらを含めてパコパンパ遺跡複合と呼ぶ場合もある。それらの遺跡のひとつであるカピーヤ遺跡は、パコパンパ遺跡の東約 700m に位置しており、パコパンパ考古学調査団によって発掘調査された。

2016 年に実施された発掘調査では、建築シーケンスや編年を明らかにすることで、パコパンパ遺跡との関連性を考察することを目的とした。その結果、PCI 期 (B.C. 1200-800)、PCII 期 (B.C. 800-500) の土器のタイプ構成が両遺跡で共通するものの、PCII 期の遺構は検出されず、この時期には活動がパコパンパ遺跡に集中することが明らかになった。一方で、同遺跡では、PCII 期以降の土器や遺構も多く検出された。特に、PCII 期直上の層から、PCI 期や PCII 期の土器とは異なる土器群が検出され、カピーヤ土器複合と名付けられた。この土器複合は、PCII 期以降であることは明らかであるが、具体的な編年の位置づけが不明であった。この問題を解決するために、2019 年に二度目の発掘調査が実施された。

本発表では、この 2019 年の発掘調査によって出土した、カピーヤ土器複合を含む PCII 期以降の土器の分析結果を示す。層によって土器の属性がどのように現れるかを分析することで、それらの属性の相対的な新旧を明らかにする。そして、それらの属性を他地域の編年と比較することで、カピーヤ遺跡出土土器の、アンデス考古学における編年の位置づけを考察する。

カピーヤ遺跡を含むパコパンパ遺跡複合は、形成期の祭祀センターとして脚光を浴びたために、形成期研究の対象とされてきたが、実際は個々の遺跡で、祭祀センターの機能を失った後の時期の利用も確認されている。本研究は、そのような遺跡形成を解明するための第一歩として行われたものである。

北部ペルーにおけるワリ期の遺跡テルレン・ラ・ボンバの発掘調査概報

渡部森哉（南山大学）

フアン・ウガス（独立研究者）

発表要旨

後 8 世紀から 10 世紀にかけて、ペルー中央高地南部のワリ遺跡を中心にワリ帝国が台頭した。発表者は 2008 年に発掘調査の始まったエル・パラシオ遺跡のデータに基づき、ワリ帝国はカハマルカ地方まで直接支配を行ったと考えている。また、ペルー北海岸においては、サン・ホセ・デ・モロ遺跡、サンタ・ロサ・デ・プカラ遺跡などでワリ文化の明確な証拠が確認されている。重要なのは、ペルー北海岸におけるワリ文化の証拠が確認される遺跡では、多くの場合カハマルカ文化の土器が共伴するという事実である。そのため、ペルー北海岸に、ワリの人々はカハマルカ経由で進出したと考えられる。

カハマルカ地方とペルー北海岸を結ぶ主要なルートがヘケテペケ川である。この河川流域の状況を把握することが、ペルー北部におけるワリ帝国の支配のあり方を理解する鍵となる。ヘケテペケ川中流域に位置するパレドネス遺跡はワリ帝国期の遺跡であり、ティワナク様式的な土器が出土している。しかしそれ以外にワリ期の遺跡の調査はなかったため、データの蓄積が課題となっていた。

パレドネス遺跡よりも下流に位置するテルレン・ラ・ボンバ遺跡は、地表に海岸カハマルカ様式の土器片が多く出土していることなどから、ワリ期の遺跡と考えてきた。2019 年に発掘調査を実施した結果、ワリ期に建設が始まり、ワリ期に放棄されたことが明らかとなった。出土土器の多くは海岸カハマルカ様式、およびカハマルカ文化のものであり、それ以外に、ペルー北海岸のチムー文化、シカン文化、およびワリ文化の土器が出土した。また、木製のケロも 2 点出土した。さらにほぼすべてが荒らされていたが、おそらく複数のミイラを安置したと思われる集合墓が複数確認された。また一部の建築では複雑な更新過程が確認できた。本発表では、基本的なデータを紹介し、テルレン・ラ・ボンバがどのような性格の遺跡であったのかについて、現地点での見通しを述べる。

ペルー中央海岸部リマ市ラ・モリナ区における古代給水システムの研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante（立命館大学）

発表要旨

先スペイン時代の給水システムを研究することは、特に大都市環境においては容易ではない。ペルー・リマ市がその例である。都市の発展は、主要水路やその支脈、取水口や湧泉地など、水を運用してきた形跡の多くを覆い隠し、或いは消し去ってしまった。これにより地元では、ペルー中央海岸部は、川床や冬の高湿期にしか植物が生育しない明らかな砂漠的環境であるという誤ったイメージを持たれている。しかし実際は、巨大な水路系統を利用していたため、草木の古代生育地はずっと広大なものであった。

最初にこの問題に言及した研究者の一人が、María Rostworowski (2006) で、リマの水路と、それらを管理した集団（curacazgo）に関するデータを収集した。これらの研究は後に、特にウアティカ運河や、ほぼ全体を見ることのできる最後の水路であるスルコ川のように、歴史地区にあり、歴史的記録が多く残る水路については、他の研究者によって調査が展開された。これらの研究は、先スペイン時代の水路跡を示すだけでなく、数キロメートルにもわたる貯水池や湧泉地の人工的構築を含む、複雑な灌漑システムを明らかにしている。これらの給水システムはその後、植民地時代及び共和制時代のアシエンダが、70年代のリマの都市化拡大が始まるまで利用していたため、もとの水路跡や、先スペイン時代の集落との関係を的確に解釈することが可能である。

本発表では、パブリック考古学プログラム“Huacas de La Molina”の枠組みにおいて、この地区のほぼ全土に巡らされたラティ運河の復元にむけて行ってきた調査の進捗状況を報告する。本研究の目的は、水路のルートと様々な時代における利用法を復元し、現存する先スペイン時代の遺跡との関係を分析することである。我々が収集した情報は、調査データと異なる時期に撮影された航空写真、及び GIS に基づいている。さらに、現代におけるこれらの水路の利用法や、地元住民にとっての水路の意味に関する情報収集も行っている。



図1 アテ地区とラ・モリナ地区の間に位置するラティ水路（リマ）。

Rostworowski, M. (2006) [1998]. Sistemas hidráulicos de los señoríos costeros prehispánicos. En María Rosworowski. Obras Completas. Ensayos de historia andina II. Vol. 6. pp. 93-112. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

メシーカ社会における人身犠牲—ドゥランの記録を中心に—

井上幸孝（専修大学）

発表要旨

メシーカ（アステカ）社会は、大規模な人身犠牲を行っていたことで知られる。その宗教的な意味については様々に論じられてきたが、本報告では、15世紀から16世紀初頭のメシーカ社会においてどのような種類の人身犠牲がなされ、それらがいかなる位置づけを与えられていたのかを再考ことに主眼を置く。

メシーカ社会の研究には、植民地時代初期に書かれた記録が重要な情報源となる。本報告では、サアグンの『フィレンツェ文書（ヌエバ・エスパーニャ総覧）』やアルバラード・テソソモクの『クロニカ・メヒカーナ』などと並び重要史料とされるディエゴ・ドゥランの『ヌエバ・エスパーニャ誌（Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme）』を主に利用して考察を行う。幼いころから現地で育ったドミニコ会士ドゥランは、メシーカ人の歴史のみならず、宗教や暦についても詳しい記述を残している。

メシーカ人は365日曆に沿った祭礼において様々な人身犠牲を行っていた。まず、本報告ではその概要を示す。さらに、人間を殺害する行為以外にどのようなものが神々に捧げられていたのかについても情報を抽出し、奉納物もしくは供物としての人身犠牲の位置づけを考える。さらに、メシーカ人の国家的な行事においても人身犠牲は行われた。そこで、メシーカ国家の拡張・発展の経緯において、征服戦争や王位継承などに伴って行われた人身犠牲の情報をまとめ、メシーカ王家が伝統を再編し自らの権力や繁栄を示す手段としても人身犠牲を用いた点を見る。最後に、年間の儀礼と歴史的な展開の中で行われた人身犠牲の情報をあわせることで、メシーカ社会における人身犠牲は一様にその意義を論じられるものではなく、メソアメリカの諸社会で育まれてきた宗教的な観念と、メシーカの社会や国家の進展という歴史的な変化という要素の双方を考慮する必要性がある点を指摘する。

メキシコ西部、ロス・アガベス遺跡における第3次発掘調査概報（2020）

吉田晃章（東海大学）

ロドリゴ・エスパルサ（ミチョアカン大学）

フランシスコ・ロドリゲス（プレス・デ・ラ・ルス調査団）

マリオ・レティス（ミチョアカン大学）

発表要旨

本発表は2019年度（2020年1月～3月）にメキシコ西部ハリスコ州、ロス・アルトス地方のロス・アガベス遺跡で実施された第3次発掘調査の概報である。同遺跡はメソアメリカの東西の文化や北部地域の文化の交錯する地に位置している。周辺では刻点十字文（Pecked Cross）などの独特な岩絵が発見されており、岩絵研究を含め遺跡の発掘調査を実施し、最終的にメキシコ西部と中央高原の文明がいかに結びつき発展してきたかを解明することが本研究の最終的な目的である。

2017年度の調査では、①中央広場と中央ピラミッド東側の発掘を実施し、中央広場で方形祭壇を検出したこと、②ドローン等による測量調査で、東方グアナファト州などのバヒオ伝統である方形広場を中心とした建築プランであることが判明したこと、③遺物や方形プランの建築から7世紀から11世紀にかけて遺跡が機能していたことを明らかにし、本学会で報告を行った。2018年の第2次調査では、①発掘調査により、中央広場の方形祭壇は一辺9mを超す比較的大型の祭壇であること、②中央ピラミッドの内部には、さらに古いピラミッドが隠れている可能性があること、③ピラミッドも祭壇も化粧土で覆われており基部の保存状態は比較的良好であったことなどが判明し、本学会誌で報告した。

本年の第3次発掘調査では、円形祭壇と竪坑墓の伝統を持つテウチトラン伝統の影響を確認するため、大型祭壇中央部の発掘を開始し、祭壇を建造する際に供されたと思われる土器4点を検出することができた。さらにこれらの土器の近くに堀込面が確認されており、地山を5m以上掘り込んだ竪坑も確認することができた。

本発表においては、これらの新たなデータに関して遺跡レベルで考察を行い、方形広場の中で、中央方形祭壇が遺跡の建築過程にどのように位置づけられるのかを考察する。さらに地域や地域間のレベルで予備的な考察を行い、ロス・アガベス遺跡におけるグアナファト州やミチョアカン州のバヒオ地方の伝統とハリスコ州バジェ地方のテウチトラン伝統の相互作用について論じる。最後に同地方の広場中央に設けられた祭壇と竪坑の象徴的な機能に関する解釈の可能性を指摘する。

テオティワカンとマヤの相互交流、「石柱の広場」発掘成果として

杉山三郎（アリゾナ州立大学研究教授）

杉山奈和（カリフォルニア大学リバーサイド校）

発表要旨

テオティワカンの心臓部に位置する「石柱の広場複合体」発掘プロジェクトの調査概要と成果について報告する。都市の起源、古代計画都市のシンボリズムと機能、政治体制など中心的課題を念頭に最大規模の「儀礼場-行政-住居」複合体を調査した。「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の中間に位置し、都市の中心軸である「死者の大通り」をはさみ対面する二つの巨大な建築ユニット（「石柱の広場」と「太陽のピラミッド北の広場」）から成り、まさに主要な国家活動に直接関与した人々の業務・生活空間と想定できる。発掘対象地域が広大で（東西 650 メートル、南北 350 メートル）であることから、メキシコ人類学歴史学研究所、愛知県立大学、アリゾナ州立大学、カリフォルニア大学リバーサイド校、ハーバード大学、ボストン大学の国際プロジェクトの区域分担作業として始動、全く未発掘であった同複合体を予備調査し、現在は発表著者が率いる集中発掘を行っている。特に「石柱の広場」北側にある施設は様々な儀礼を準備し、また儀礼や祝宴に使用した器、道具類の奉納埋蔵や、生贄にされた人体の処理をした空間であったと思われる。極めて小規模の予備調査にも拘らず、膨大な量の儀礼で使われた土器破片や石器、食料の残留物、また動物骨や人骨などが出土し、別の地区では人身儀礼を受けた人体の切り刻まれた骨の破片、また人骨の再利用の痕などが大量に発見されている。さらにこのテオティワカン中心地区に、マヤ古代都市から来たトップ集団が住んでいたと示唆するマヤ壁画の破片も大量に見つかっている。本報告では、調査概要と遠隔都市との関係について、特にテオティワカンとマヤの相互交流について簡潔に述べる。最後に 2019 年より始動した新学術領域研究「出ユーラシア」におけるメソアメリカ研究、古代都市比較研究との今後の研究の進め方に触れる。

ニカラグアカリブ地域における岩刻画の考古学調査

南博史（京都外国語大学）

深谷岬（京都外国語大学大学院）

発表要旨

京都外国語大学ラテンアメリカ研究所と同大学国際文化資料館は、2013年より「アメリカ地中海」文化圏を対象とする総合学術調査を実施している。この一環として、ニカラグアカリブ地域で散見される岩刻画の立地と意匠の分析を糸口に、考古学情報がほとんど無い当該地域の先住民文化の解釈と、ヒトとモノの交流を復元するための調査を開始した。本発表では、主にニカラグア北カリブ自治地域シウナ市近郊で実施した踏査の成果について報告し、今後の調査の展望について述べる。

南カリブ自治地域では、岩刻画の多くが河川付近に立地することを確認したため、河川交通の目印として岩刻画が製作されたと推定した。そして、岩刻画の立地と意匠の分析は、沿岸と河川交流の復元をする上で重要なデータを提供すると考え、北カリブ自治地域における岩刻画調査を開始した。

同国オメテペ島やホンジュラスカリブ地域ではメソアメリカやアンデスの世界観に影響を受けたと思われる意匠の岩刻画が発見されている。しかし北カリブ自治地域で実施した今回の調査ではそのような意匠は確認されず、渦巻文や幾何学文、動物・人物形象文をはじめとする比較的単純な意匠が岩刻画に施されていた。また、岩刻画の分布は河川付近と丘陵上に二分されること、比較的狭い地域に岩刻画が密集する例があることなどが明らかとなった。また、巨大な岩の上面に岩刻画が彫られている例もあり、岩に登らなければ文様を確認できないものも存在した。一見、交通の目印には適さない岩刻画が複数確認されたことで、岩刻画には多様な用途や機能が付されていたという仮説を持つに至った。

今後は、引き続き岩刻画の分布調査と意匠の分析を進め、岩刻画の機能を推定するとともに発掘調査を実施して、岩刻画が製作された背景や年代についても考察を進める。

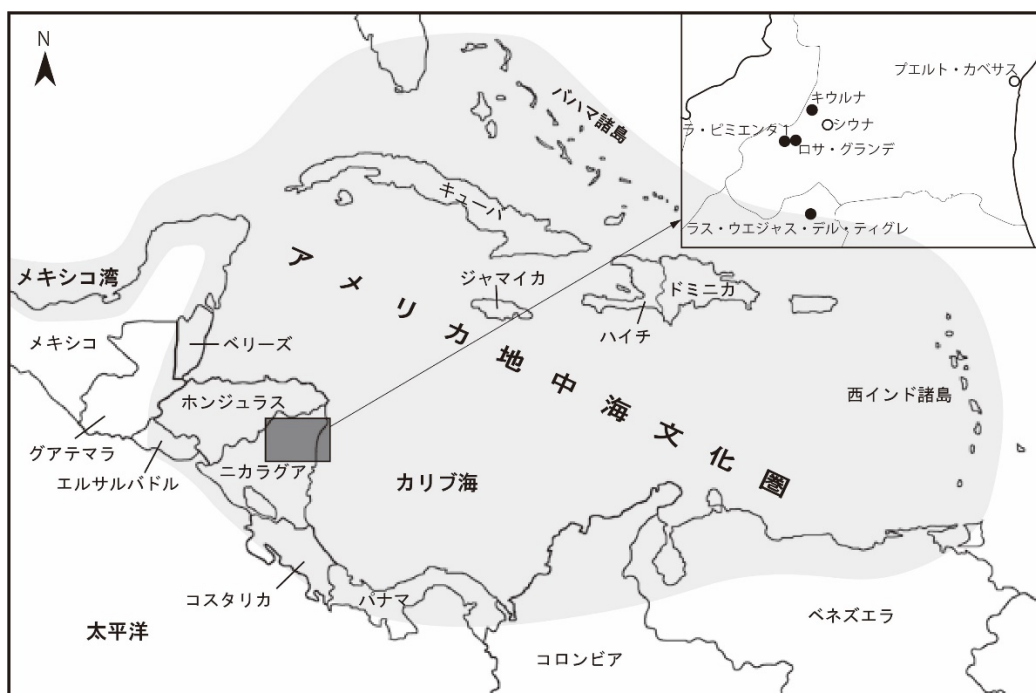


図 1：調査対象地域地図

ティカル遺跡、エリア 4F における発掘調査に関して
—ホテル・ジャングルロッジ裏、Str.4F-19, 20 における焼骨集中遺構の検出—

今泉和也（北海道大学文学研究院）

発表要旨

本発表では 2020 年にティカル国立公園にて実施した発掘調査の簡易報告と共に、古典期後期の一般層の人々が行っていた稀有な儀礼行為の一例を紹介する。

2016 年より古典期における土器生産体制の解明を目標に、継続的にティカル国立公園にて調査を実施してきた。これまでの調査結果で、2010 年に水道管設置のための工事の際に検出された遺構である、Rasgo 4F - Op.14 が古典期ティカルにおける土器焼成址の可能性があると指摘するに至った。今回の調査ではこの遺構の近くに位置する建造物グループを対象とした。エリア 4F はティカル国立公園の管理エリアであり、そのため近現代の建造物が立ち並ぶエリアである。近現代の建設工事により Op.14 の遺構の最寄りのマウンドの多くは現存していない。そのため現存するマウンドの中で最も近い距離に位置する建造物グループ 4F-19, 20 にて土器生産の証拠を集めるべく発掘調査を実施した。

2020 年 2 月に実施した本調査では建造物 4F-19 における調査を完了しておらず、2021 年に継続的に調査を実施する予定である。そのため建造物グループ 4F-19, 20 に対する調査は全体として未完であるが、これまでのところこの建造物グループでは Marshall Becker (2003) が指摘するような土器生産活動を示す痕跡は発見できていない。またこの建造物グループでは古典期後期に居住が開始されており、土器焼成址と考えられる古典期前期の遺構 (Op.14) とはそもそも時間的な開きがあることが分かった。

またこの周辺はかつて母岩である石灰岩が露出していた場所であることが分かった。建造物基壇の形成の前に、火葬を行った、あるいは別地点のより古い人骨を取り出して焼き、母岩の直上に配置して再葬するという儀礼を行っていた可能性がある。火葬と判断できる埋葬形態はマヤ地域でも見られるが、後古典期において一般化するとされている。古典期以前における火葬の事例も確認されているが、これまでエリート層に属すると考えられる埋葬遺構においてのみ検出事例がある。

グアテマラ、ニシュトゥン・チチ遺跡の発掘と黒曜石分析

白鳥祐子（日本学術振興会）

ケリー・マクラファティ（ニューヨーク市立大学クィーンズ校）

発表要旨

グアテマラ、ペテン・イツァ湖西部に位置するニシュトゥン・チチ遺跡は、湖に突き出たカンデラリア半島上にあり、450を超える建造物が東西3kmに渡って確認されている。1990年代半ばより断続的に行われてきた発掘調査により、ニシュトゥン・チチ遺跡は先古典期初期終盤（c. 1100BCE-）から18世紀初頭までの連続した居住の痕跡が明らかになっている。

17世紀スペイン人の記述によれば、ニシュトゥン・チチ遺跡があるカンデラリア半島はチャカン・イツァ族が統治していたとされる。1696年に訪れたスペイン人宣教師は、チャカン・イツァ領にいくつかの集落があり、その中心的な集落はニッチ（Nich）またはチッチ（Ch' ich'）と呼ばれ、10ほどの家屋があったと記述している。このニッチ（またはチッチ）集落は、発掘調査によってカンデラリア半島東端の建造物群であると結論付けられた。この他にも13～17世紀の遺物や建造物が遺跡内で確認されているが、チャカン・イツァ族の物質文化を構築するにはまだデータ不十分である。

2019年に行われた発掘調査では、カンデラリア半島南西部の湖岸から100m内陸部に位置する後古典期（1100-1525CE）の建造物群に焦点を当て、後古典期の住居址と祭祀建造物址を調査した。本調査の主目的はチャカン・イツァ族の物質文化のデータ収集である。特に、産地が特定される黒曜石を調べることで、チャカン・イツァ族の黒曜石獲得戦略が推測でき、近隣都市との比較が可能になる。チャカン・イツァ族はイツァ族の家系でありながら、イツァ族の統治者アハウ・カン・エク（Ajaw Kan Ek'）と敵対しており、17世紀にイツァ族制圧のためスペイン人に手を貸したコウォ族とも手を組んでいた。このような状況の中で、チャカン・イツァ族はイツァ族とは異なる物資の流通経路があったのではないかと推測する。

本発表では、2019年に行った発掘調査の概要を示し、ハンドヘルド蛍光X線分析器による黒曜石の元素分析の結果を報告し、チャカン・イツァ族の物質文化について予備的な考察をする。

ホンジュラス、コパン遺跡におけるウルア・ヨホア多彩色土器に関する一考察

緒方理彩（金沢大学大学院）

発表要旨

本発表では、コパン出土のウルア・ヨホア多彩色土器について、完形土器を中心に研究対象とし、放射性炭素年代測定の結果や出土コンテクスト、共伴する土器との照らし合わせを行いながら、年代や使用意図について考察を行う。

ウルア・ヨホア多彩色土器の先行研究の年代について、Rosemary Joyce らの研究における当時の放射性炭素年代測定の結果として出ている年代は幅が広く、その中で編年を行うことが問題点として考えられた。コパンにおいてはウルア・ヨホア多彩色土器の生産の歴史の早い時期（西暦 550 年から 700 年の間）に使用が始まると Joyce が指摘する一方で、Cassandra Bill はウルア・ヨホア多彩色土器についてコネール後期(西暦 750 年から 820 年頃)の編年のマーカーになると述べており、研究者の間で年代の比定に違いが見られる。

以上の問題について考えるため、コパンで出土しているウルア・ヨホア多彩色土器の整理を行い、編年のマーカーになると考えられるホヤ・デ・セレンの黒い装飾が際立つ土器と類似する土器との共伴関係や、PROARCO により出土している土器の放射性炭素年代測定の結果から、先行研究において比定されている年代の確認を行った。結果から、ウルア・ヨホア多彩色土器の中のレッド・グループとされるデダロス・クラスとサンタリタ・クラスについては、西暦 550 年から 700 年の間に副葬品としての使用が行われたことが考えられ、さらにマロン・グループのヨホア・クラスについてもレッド・グループと使用時期が重なることが考察された。

コパン遺跡における出土コンテクストからは、ウルア・ヨホア多彩色土器が副葬品の中でも特別な位置づけが行われていることが確認され、副葬品ではない埋納としての使用も見られた。ウルア・ヨホア多彩色土器は、祖国や祖先の象徴としての所持、または副葬品となった事も考えられるが、外の地域との世帯レベルでの個人的な交流の可能性から贈与品である可能性もあり、交易品としての価値もあると考察された。

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区出土の土偶

相場伸彦（名古屋大学大学院）

伊藤伸幸（名古屋大学）

発表要旨

チャルチュアパ遺跡は、エルサルバドル共和国サンタアナ県チャルチュアパのパス川とその支流の間にあるアワチャパン□チャルチュアパ盆地（標高約 700m）に位置している。チャルチュアパ遺跡は複数の地区に分けられており、エル・トラピチェ地区はチャルチュアパ遺跡の最も北側に位置している。

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区は 2012 年から現在まで、名古屋大学を中心に、発掘調査が継続的におこなわれてきた。E3-1・E3-2・E3-3・E3-4・E3-6 建造物の周辺に、発掘区は設定されている。主な遺構は、石列・フラスコ状ピットなどが挙げられる。遺物は、土器・土偶・石器などが出土している。本発表は、エル・トラピチェ地区から出土した土偶の報告、及び先行研究と比較することを目的としている。

エル・トラピチェ地区では、土偶はほぼ全ての発掘区から出土し、フラスコ状ピット内からも出土した。完形の土偶は確認できなかった。

先行研究において、チャルチュアパ遺跡出土の土偶は形態的特徴をもとに、型式学的研究法がおこなわれてきた。その中でも Dahlin の研究は、土偶の型式の設定や時期的な変遷について考察した重要な研究である。

分析では、先行研究の分類を参考に、エル・トラピチェ地区出土の先古典期土偶に対して形態的特徴に基づく型式分類をおこなった。その結果、既存の型式に該当する土偶と型式不明の土偶が多数出土していることが明らかになった。さらに型式不明の土偶の中には、新たに型式を設定できるものも含まれていた。また、エル・トラピチェ地区から出土した土偶のなかには、オルメカ文化などの影響がみられる土偶も出土していた。

以上、先行研究におけるエル・トラピチェ地区の土偶の位置づけと他の遺跡の土偶との関係について考察し、土偶研究の課題について報告する。

マヤ南東周縁部における黒曜石交易ネットワークの研究
ーホンジュ ホンジュ ラス、アサクアルパ遺跡出土の黒曜石資料分析を中心にー

小川雅洋（金沢大学大学院）

発表要旨

黒曜石は、マグマの化学組成や生成過程の違いに伴って、岩石学的特徴や化学組成も各原産地で差異が生じるという特徴を有する。このため、従来の研究でも、遺跡から出土した黒曜石製石器と各原産地の原石サンプルの特徴を比較することで、遺物の原産地を明らかにし、黒曜石の交易ネットワークが論じられてきた。

本発表の対象となるマヤ南東地域では、肉眼分析による原産地推定結果に基づき、マヤ南東地域の一大都市であったコパンがイシュテペケ産黒曜石を統御し、その周辺地域へ黒曜石を供給していたことが定説とされている。また、コパンの周辺地域に相当するラ・エントラダ地域において、その最北部では、サン・ルイス産黒曜石の比率が増えることが報告されており、これがコパンの黒曜石分配圏の境界を示すと解釈されている (e. g. Aoyama 1999)。

本発表で中心的に扱うアサクアルパ遺跡は、ラ・エントラダ地域の北東に隣接するキミスタン谷西部に位置する。この遺跡は、JICA青年海外協力隊事業によるラ・エントラダ考古学プロジェクトの一環で、1991年に発掘調査が行われた。往時の地域センターとして機能したことに加え、そのセトルメントパターンなどから、「非マヤ」に相当する文化パターンと考えられている。そのため、まさにマヤ地域と「非マヤ」地域の境界および先行研究が提示するコパンの黒曜石分配圏外に位置するとされている。

マヤ南東地域における交易ネットワークの実態をさらに解明するために、本発表では、アサクアルパ遺跡とラ・エントラダ地域の大規模地域センター（ロス・イゴス遺跡など）を対象に、出土した黒曜石資料を分析した結果を提示する。特に、黒曜石資料の出土コンテキスト、器種、長さ、幅、厚さ、重さなどのデータを取得するとともに、より反証性が担保される蛍光X線分析による原産地推定を行うことで得られた分析結果をもとに、アサクアルパ遺跡から出土した黒曜石資料の原産地や出土の傾向を明らかにする。加えて、ラ・エントラダ地域の大規模地域センター出土の黒曜石資料との比較を通して、マヤ地域と「非マヤ」地域の境界に相当するマヤ南東地域における黒曜石の交易ネットワークを考察する。

ホンジュラス共和国コパン・ルイナス市における文化遺産の利用実態と課題

五木田まきは（東京文化財研究所）

発表要旨

ホンジュラス共和国のコパン遺跡は多くの重要な学説を提供してきたマヤ文明研究の拠点の1つであり、最も早く世界遺産登録されたマヤ文明を代表する遺跡として、文化遺産の保全と活用の分野においても先駆的な役割を果たすことも期待されている。これまでも、遺跡の保存と人材育成を目的とした発掘調査や、展示施設や博物館建設など、成果発信を目的とした活動は行なわれている。

文化遺産に関する国際的な動向は、文化遺産そのものへの注目から徐々に管理者、あるいは遺産の基盤としてのコミュニティの関与という視点が重視されるようになってきている。コパン遺跡を管轄するホンジュラス国立人類学歴史学研究所も、2013年に発行した「コパン遺跡管理計画」において、コミュニティの関与拡大について大きく紙面を割き、2019年の世界遺産委員会に提出された保全状況報告書においても、地域コミュニティの参加はサイト管理の重要な要素であり、コパン・ルイナス市、商工会議所、先住民組織等の利害関係者との合意、教育プログラムや地元の雇用が促進されていることを報告している。同委員会における世界遺産センターと諮問機関の結論においても、これらの活動を評価し、2021年に発効する新たな管理計画においても継続することを求めている。

しかし、遺跡の保存活用にコミュニティを巻き込むための基礎情報とも言える地域住民と文化遺産の関係の現状については調査研究が進んでおらず、地域住民の遺跡利用の現状や遺跡や文化遺産への意識は解明されていない。こうした状況を受け、発表者はコパン・ルイナス市の住民による文化遺産の利用、特に公立の初等教育における遺跡および博物館の利用実態について調査を行ってきた。本発表では、ホンジュラス国民が持つ遺跡に対するイメージ、および私学も含めた地域の初・中等教育における博物館や遺跡の利用実態に関して、これまでの調査の成果を報告する。

全周カメラ画像による 3 次元測量の可能性と課題：
ホンジュラス、コパン遺跡での事例から

寺崎秀一郎（早稲田大学）

発表要旨

近年、考古学研究の領域においても、デジタル技術の進展、普及により遺跡・遺構の・遺物 3 次元化が身近なものとなってきた。現在、考古学研究の現場で用いられる 3 次元測量は、据え置き型、あるいは移動型のレーザースキャナを利用したものと SfM と呼ばれる静止画像の合成によるものに大別される。両者には導入コスト、計測、および解析に要する時間、分解能、あるいは操作に関わる練度などに違いがみられる。一方で、共通する「弱点」として、レーザー光が到達しない領域や静止画像に写らない領域が生じた場合、そこには空隙が生じ、補完的な測量がさらに必要になるという点が挙げられる。

マヤ遺跡の複雑な石造構造物や入り組んだトンネルなど、上記の「弱点」が測量を実施する上で問題となる。そこで、発表者らは、測量をおこなう際の死角を低減するということに着目し、ホンジュラス国立人類学研究所の協力のもと、コパン遺跡で全周カメラ画像を用いた SfM 画像解析を試みた。

対象は、アクロポリス内の「トンネル 1-6」とした。トンネルを選定したのは、閉鎖空間であることから、全周カメラの特性が活かされると想定されること、また、対象物までの距離を長く取ることができない狭いトンネル内において、最短焦点距離が 10cm という全周カメラは据え置き型レーザースキャナや一般的なデジタルカメラよりも有効であると考えられたためである。なお、測量に当たっては、トンネル内にターゲットを配置し、各ターゲットには仮に設定した基準点から座標を与えた。撮影に際しては、LED 照明 2 灯のもと、約 50cm 間隔で撮影をおこない、タイポイントを確保できるよう試みた。撮影に使用した全周カメラはリコー製 Theta SC、SfM 解析は Agisoft 製 Metashape でおこなった。

SfM 画像解析の結果、導入コスト、測量・撮影、および画像処理に要する時間、成果物等を総合的に勘案し、その有効性を確認することができた。ただし、その精度の検証はいまだ不十分であり、別種のデータとのマッチングも必要と思われる。また、導入、運用についての敷居の低さは、継続的なモニタリングデータ採取などへの活用も考えられる。

宇宙線ミュオンを使った非破壊的考古学調査法の開拓

中村 誠一（金沢大学）

森島 邦博（名古屋大学）

発表要旨

古い時代の建造物を埋めて新しい時代の建造物をその上に建築していく重層構造を持つマヤ文明の遺跡では、ピラミッド状建造物のような大規模建造物の内部構造の調査に、伝統的にトンネル発掘法が使われている。トンネル発掘法は、安価であるというそのコスト面の効率性だけではなく、下に埋まっている古い時代の建造物の調査のために、上に覆っている新しい時代の建造物の破壊を最小限で抑えられるという遺跡保存の面からも正当化されている。特に低地マヤ考古学においては、今のところ重層的な大規模建造物の発掘に、トンネル発掘法にかわる有効な考古学調査法は見出されていないのが現状である。

古典期マヤ文明（西暦 250～900 年頃）を代表する古代都市遺跡において、このトンネル発掘法が最も広範に適用され、大きな成果を挙げてきた遺跡の一つは、ホンジュラスの世界遺産「コパンのマヤ遺跡」である。ここでは、1930 年代にアメリカのカーネギー研究所が主要な建造物でトンネル発掘を行ったのを皮切りに、歴代の考古学プロジェクトがトンネル発掘法を多用してきた。特に、1989 年から 1996 年まで行われたコパンアクロポリス考古学プロジェクトにおいては、アクロポリスの東側に全長 3 キロを超えるトンネル網が掘られ、豪華な副葬品や多彩色の壁面漆喰装飾をもつ複数の王家の墓の発見につながった。しかし同時に、アリの巣のようなトンネル網は、アクロポリスの構造的な安定性を崩し遺跡保存上の問題を引き起こしている。

本発表では、このような経緯を教訓として、コパン遺跡アクロポリスにおける今後の発掘調査におけるトンネル発掘を必要最小限に抑えるため、名古屋大学のチームと共同で実施している文理融合研究を紹介する。これは、宇宙線ミュオンによる建造物の透視を使う革新的技術で、この研究の進展が新たな非破壊的考古学調査法の開拓につながると期待されている。

コスタリカにおける石斧型ペンダント(500BC-AD900)に関する製作技術・製作者の多様性 —顕微鏡観察・製作実験の結果から—

久保山和佳（サウサンプトン大学大学院）

発表要旨

コスタリカの石斧型ペンダントは、前500年～後900年に利用された威信財であり、墓の副葬品として出土する。その出現期は当該地域において社会の階層化が認められるようになった時期でもある。本研究は、石斧型ペンダントの製作技術の多様性と技術体系を明らかにすることを目的としている。また、同ペンダントの特異な製作工程の一つである斧状素材の分割が、複雑な技術であるにも拘らず選択された理由と、その社会的役割を考察する。

上記の目的を達成するため、発表者はコスタリカ国立博物館およびヒスイ博物館において約300点の石斧型ペンダントの形態分類と製作痕分析を行った。顕微鏡とRTI（Reflectance Transformation Imaging）による彫刻文様と製作痕の分析結果をもとに、石灰岩を利用して、同ペンダントの製作において代表的なHalf celtとWhole celt技術の工程を再現した。その後、ヒスイ、クオーツ、蛇紋岩を使用して成形、研磨、擦切り、穿孔の実験を行うことで石材別の製作コストを検討した。

石斧型ペンダントは、ヒスイ（ジェダイト、ネフライト）または“社会的ヒスイ”と呼ばれるクオーツ、蛇紋岩、玉髄、ジャスパー、その他の石材から作出され、側面には穿孔が施される。ペンダント正面上部には人間や鳥、ネコ科動物などが彫刻され、各モチーフの複雑さや彫刻の難易度には個体差がある。一方、下部には彫刻の無い刃部が残存する(図1)。石斧型ペンダントはコスタリカのヒスイ製品の中でも比較的検出例が多く、製作痕を確認できることから、当時の技術体系を素描するのにふさわしい遺物である。石斧型ペンダントは、その製作工程において、素材を擦切りによって分割するという技術的特徴を有しており、完成品の背面には切断面が残存する。擦切りによる切断面は研磨度合いや形状、擦切り幅に個体差が見られ、製作者の技術差を反映すると考えられる。また、分割されたペンダントは異なる個人に所有・埋葬されたと考えられており、破片が対になって同じ遺跡から出土することは稀である。このことから、石斧型ペンダントが、素材の半割と他者への再分配によって、個々人の繋がりを強化・可視化するという社会的役割を果たしていた可能性が窺える。

先行研究において、石斧型ペンダントは首長が威信財として所有した貴重品であると解釈されている。しかしながら、石斧型ペンダントは石材種、彫刻モチーフ、形状、また製作工程や技術は多種多様であり、一つの石斧状素材から作り出される完成品の数も異なる。これは、異なる技術的背景を有する人々が石斧型ペンダントの製作に携わり、所有者や製作者が一様ではない可能性を示唆している。この様に、石斧型ペンダントの素材石材、技

術、また完成品の形態は技術拡散の過程で多様化したと推測できる。その一方で、製作者は斧形状を受け継ぎ、装飾の無い刃部を残すことで、ペンダントの価値や希少性を担保し、個々の製作者の技術的・経済的差異に拘らず再生産を可能にしたと推測できる。

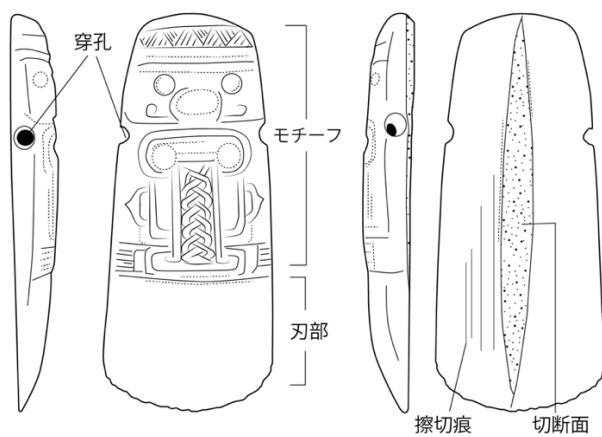


図1 石斧型ペンダントの部位名称

中期ホライズンにおけるワウラ様式の人物型図像とその特徴について

市木尚利（立命館大学）

発表要旨

本発表は、ペルー・ワウラ谷下流域を中心に出土するワウラ様式図像彩色土器（中期ホライズン後半、後8世紀-10世紀頃）に描かれる人物型図像とその特徴について報告するものである。そして、明らかにした特徴を基準とすることで、他地域の様式にみられる人物型図像との比較研究が可能になり、地域間関係をイコノグラフィー研究から考察することにもつながるのである。

分析対象とする人物型図像は、黒線で縁取りをしながら輪郭を作り、その内側を赤茶褐色、白色、青灰色を主に利用しながら色づけがなされている。基本的には、植物（トウモロコシ）群生状の表現に単独の人物型図像が表現されている。ただし、一例ではあるが、異なる形態の冠を載せた二つの図像が並ぶものがある。

人物型図像と描かれる植物は、トウモロコシや種子型の表現への関心を中心に行っていると考えられる。しかし、それ以外の植物、木の実やイモなどの図像表現は積極的には確認できず、図像の中では関心が皆無である。また、家畜化されたラクダ科動物の図像表現もみられない。これらの点についても注意を払う必要がある。

さらに同時期と考えられる土偶との比較から、ワウラの人物型図像には性差の表現があると考えられる。土偶は、特定の冠と性差が一致する事例が非常に多い。このことが人物型図像にも表現されている。

さらに冠の多様性も認められる。但し、ワリ文化の人物型図像と一見類似した冠あるいは装飾をもつ事例があるが、冠の多くがペルー海岸北部やワウラとその周辺地域に由来するものと考えられる。また冠について、人物型図像のみにみられるものと、他の図像と共有されるものがある。

今回の検討によって、ワウラ様式図像彩色土器とワリ様式の人物型図像群との間には、社会的規範が共有されていることは十分に考えられる。つまり、モチーフの構成とそれに付随する概念が共有されている可能性はある。

しかし、ワリ様式にみる人物型図像は基本的にはワウラ図像彩色土器には認めにくい。南部に由来するよりも、ペルー海岸北部に由来をもつ冠をもつ図像や在地特有の人物型図像の表現が主体であることが指摘できる。このことからワリ拡大以降、ワウラとその隣接地域にペルー北海岸に由来する図像文様が普及・在地化していったと考えられる。

泳ぐ鳥か空舞う魚か：
ペルー南高地、形成期プカラ様式図像にみられる「魚」をめぐって

佐藤吉文（国立民族学博物館）

発表要旨

ペルー南高地のプカラ文化を対象に、ジェンダーの視点から発表者が近年取り組んできた動物図像理解においては、アレキパ地方沿岸部で確認された地方プカラ様式という一群の織物にあらわれる図像が新たな問題を提起し続けている。その一つに「魚」の図像をめぐることがある。C.チャベスは、その綿密な土器図像分析において、資料不足としてこの動物図像の分析を留保した。しかし、プカラ文化において「魚」は決して周縁的な動物ではない。なぜならば、プカラ遺跡をはじめとしたチチカカ湖周辺ではそれを表現した石彫が多く認められ、地方プカラ様式の織物図像、とりわけ「杖の四女神」には、魚がヘビ、コンドル、ネコ科動物と並ぶ位置づけを与えられているからである。であるなら、一昨年前に示したとおり、「魚」についてもまた、「分けられない動物たち」を含む同じ宇宙論あるいは宇宙生成論のなかでそのジェンダー的位置づけを問われなければならない。

「魚」のジェンダーを理解するにあたって資料に制約があることは変わらないが、この問題を克服するため、本発表では、プカラ文化の中心領域だけでなくそれに隣接する海岸文化まで考察対象を拡大し、プカラ様式を含めた SAIS 図像群の形成プロセスを踏まえ、さらに植民地期前半に記録されたペルー海岸部の神話を補助線として、1) ペルー南方地域における魚のジェンダー、2) 先行諸文化とは一線を画すプカラ文化における魚を含めた図像表現の由来、3) この動物がそもそも「魚」であるのか、という3点を検討することで、この動物のジェンダーを仮説的に示す。そのうえで、4) ふたたび「杖の四女神」の外套を含む地方プカラ様式の織物全体のなかにこの動物を位置づけてプカラの宇宙論を示したい。

植民地期採録のペルー海岸部の神話は、魚と女性の結びつきを暗示する。その関係は前期中間期のリマ文化までさかのぼる。リマ文化に特徴的な魚表現は、女性性との結びつきを直接示さないかたちで、在地の先行土器様式に出現する。パラカス終末期にあたるその時代、ペルー中央海岸から南海岸にかけての太平洋岸には文化接触を認めることができ、その接触領域をつうじてアレキパ沿岸部まで「光芒する顔」の図像が伝わった。パラカス文化とプカラ文化の図像にみられる表現の向きやキメラ性といった共通性を念頭に置くと、アレキパ沿岸部がペルー中央海岸にいたる文化接触圏の一翼を担うという事実は、魚と女性性をむすぶ観念がそれらと同時にこの地まで及んでいた可能性を強く示唆する。

地方プカラ様式織物群に現れる「魚」を含む4種の動物は3+1という関係に整理することができる。一見、この関係は一組である。だが、動物ジェンダーの視点を導入すると別の組が現れる。本論の最後では、この二組の関係を論じることによってプカラ文化における宇宙論を提示する。

チチャ醸造再考～考古学者たちはどのように酒造りを論じてきたか

松本剛（山形大学）

発表要旨

本発表の目的は三つある。第一に、先スペイン期のチチャ醸造に関する研究史をレビューし、おもにどのようなデータをもとに議論がなされてきたかを明らかにする。第二に、トウモロコシから作られるチチャに焦点を絞り、穀物由来の澱粉と酵素を利用した醸造酒の製造プロセスを正しく理解することで、チチャ醸造の物質的指標として用いられてきたデータの妥当性を検証する。最後に、上記の二つを土台として、発表者によるこれまでの研究におけるデータ解釈の誤りを正すとともに、再解釈を行う。

民族歴史学資料におけるチチャ醸造に関する記述や、民族考古学的な現代の醸造現場の観察は、考古学者にとって多くの有益な情報を提供してきた。そのため、これまでの研究の多くは、こうした民族考古学的アナロジーに依拠している。本発表の最後に論じる発表者による研究も例外ではない。アナロジーから得られる物質的指標には様々なものがあるが、ハヤシダ（2008）は、民族誌的に記録された行動および物質的パターンをそのまま先スペイン期のそれに適用することはできないと警鐘を鳴らしている。

たとえば、現在はチチャ醸造にしか使われていない道具が、先スペイン期には醸造だけでなく、他の用途にも使われていた可能性があるし、同じ形の道具が過去においてはまったく別の使われ方をしていた可能性もある。また、すでに使われなくなり、現存してない道具もあるかもしれない。考古学者が民族誌や民族歴史学的記録を参照・援用する際には、こうした可能性を十分に考慮しなくてはならない。

発表者は博士論文研究において、土器内壁や土壌サンプル内に検出されたトウモロコシ澱粉粒の存在と **extinction cross** と呼ばれるマーカーの形状変化を根拠に、チチャ醸造の可能性を論じたが（Matsumoto 2014）、これは大きな誤りであった。澱粉の有無は醸造の痕跡を意味しない。データの妥当性を正しく検証するには、醸造プロセスを正確に理解することが重要である。

アルコール醗酵とは、おもに酵母菌が糖分を分解することによって、エタノールと二酸化炭素を生成しながらエネルギーに変える代謝プロセスである。澱粉系穀物をおもな原材料とするが、穀物をそのままの状態でも酵母菌はこれを消費できない。澱粉は多糖であり、酵母菌には大きすぎて分解できないため、単糖にまで分解してやる必要がある。トウモロコシでチチャをつくる場合は、トウモロコシ粒を発芽させることによって生じる酵素を使って澱粉の糖化を行う。したがって、証明すべきは澱粉の存在ではなく、発芽プロセスの有無である。

澱粉粒分析によるこれまでの研究成果を渉猟し、上述の分析結果を再検証したところ、トウモロコシ粒を発芽させたことを示すかもしれない特徴を確認することができた。本発表ではその詳細について論じる。さらに加えて、最新の発掘（2019 年）から得られたデータのなかから醸造に関するデータとして新しく使えそうなものも提示する

二枚貝のスクレクロノロジーと古環境
—ペルー北海岸のエル・ニーニョ現象に迫る—

莊司一歩（国立民族学博物館）
白井厚太郎（東京大学大気海洋研究所）
杉原奈央子（東京大学大気海洋研究所）

発表要旨

アンデス文明史における公共建造物の出現過程を解明することを目的に、発表者はペルー北海岸、クルス・ベルデ遺跡で発掘調査を実施してきた。その成果によって、同遺跡が有するマウンド状遺構（以下、マウンド）は、日々の生態資源利用によって生み出される様々な残滓が反復的に廃棄され、盛土が行われる中で徐々に形成されてきたことが明らかになった。その形成過程は、反復的な廃棄実践を中心とした CV-Ia 期（4200-4000 BC）から、廃棄と埋葬、床の建設活動を繰り返し、マウンドが公共建造物としての性格を帯びるようになる CV-Ib 期（4000-3800 BC）へと明瞭に変化する。それだけでなく、双方の時期で出土する動物遺存体の内訳も大きく変化することから、生態資源利用の変化とマウンドの形成過程の変化に密接な関係があったことが想定される。出土する動物種の生態学的な特徴は、この時期に生態環境の変化があったことを示唆しているものの、それが具体的などのような変化であったのかという点に未解決の課題が残る。海底・湖底堆積物の分析をはじめ、これまで古環境変動に関する研究が多く行われてきたが、いずれも巨視的な時間幅での変化を対象としたものであり、クルス・ベルデ遺跡の調査成果が示すような短期的な変化に適したデータは北海岸において不足しているのが現状である。

そこで本発表では、遺跡から出土する二枚貝を対象にスクレクロノロジー（Sclerochronology）にもとづく分析を実施し、4000 BC 頃に起きた環境変動の実態解明を試みた。スクレクロノロジーとは、成長縞として現れる生体鉱物の成長履歴から生物のライフヒストリーや環境の変化を復元しようとする学問である。とくに二枚貝の場合、年単位やそれよりも高精細の成長周期を観察可能なこと、遺跡から出土する考古資料を直接分析できることから、考古学データとの親和性が高い。

本発表における分析対象となるのは、オオヌノメアサリ（*Protothaca thaca*）であり、まずは、この種の貝殻の成長パターンと環境因子の関係を明らかにするために、現生標本を採集し、分析を実施した。その結果、同種の貝殻の成長パターンは、潮汐と海水温という2つの要素に応じて周期的に変化していることが明らかになった。とくに、エル・ニーニョ現象に際して海水温が急上昇する間、貝殻の成長は停滞し、大きな成長障害輪（Major Growth Anomaly）が形成されることがわかった。オオヌノメアサリの成長履歴には、個体が過去に経験した海域環境の異常が明瞭な痕跡として残されている。

現生資料の分析によって明らかになった上述の知見を用い、計 47 個体の考古資料を対象に成長障害輪の計測とカウントを行った。その結果、エル・ニーニョ現象の指標となる 400 μ m 以上の成長障害輪を持つ個体の割合は、CV-Ia 期で 33.3%であったのに対し、CV-Ib 期では 77.8%と急増する。すなわち、CV-Ib 期になるとエル・ニーニョ現象の規模と頻度

が増加していたことが指摘できる。クルス・ベルデ遺跡の出土遺物が示唆する環境変動とは、エル・ニーニョ現象の頻度と規模が増大するという性格のものであったことが確かめられ、これに伴う様々な社会实践の変容がマウンドの形成過程に変化をもたらす要因となったと考えられる。

新世界の食人表象再考： そのイメージの源泉

大平秀一（東海大学）

発表要旨

新世界における食人表象は、1492年に開始されたクリストバル・コロンによる航海と共に始まる。その第1回航海の記録では、「食人族」の存在に関する情報が示され、第2回航海の記録では、「カリベ族」における食人の慣習が詳述されている。アメリゴ・ヴェスプッチも、すべての航海の記録において食人の慣習を記述しており、第3回航海ではキリスト教徒がその犠牲になったことにも言及している。そして、「発見」した場所が初めて「新世界」と呼ばれる記録（『新世界』c.1503）では、新世界先住民社会における食人の慣習が明記され、1505年にはアウグスブルグにおいてその様子を示した木版画が製作されている。16世紀半ばには、ブラジルに10カ月滞在したドイツ人のハンス・シュターデンやフランスのアンドレ・テヴェにより、トゥピナンバの食人の慣習が、捕縛・殺害・解体・調理・食事という一連の過程を追って詳述されている。これらの記録には、木版画によってその過程が図示されており、見る者に大きなインパクトを与える。それが故に、これらの書物は人気を博して各国語に翻訳され、多くの版を重ねている。これらの記述と図は、16世紀末～17世紀初頭にオランダのテオドール・ド・ブリとその息子たちによって作成され、広く流通した銅版画をはじめ、後代の食人表象にも多大な影響を与えている。

食人は、裸体・性的乱交などと共に新世界先住民の野蛮性のシンボルとして位置づけられ、ヨーロッパ各地において好んで取り上げられた題材である。それが繰り返されたことにより、その慣習は、新世界ならびに新世界先住民の記号の一つとも化していった。タブーを犯す食人は、エキゾチシズムへの欲求を満たす最大の要素でもあり、多大な関心を集め続けた。それが20世紀にいたっても継承されていることは、「人間動物園」における展示の特性（「食人族」を好む）、そのテーマを扱った多様な映画の存在、そして人類学・考古学の領域における議論に目を向ければ明らかであろう。食人をめぐる多様な言説の中で、新世界先住民は常に「主役」の座にあったとあってよい。その理由は、「発見」以後に、まことしやかな表象が多く残されてきたからにほかならない。

1492年以後、ヨーロッパにおいて蓄積されていった新世界表象は、先住民社会をめぐる研究にも大きな影響を与えてきた。新世界側の研究者にとって、それらの表象は、歴史的に文字をもたない先住民の社会・文化・歴史を具体的に捉え得る「資料」として常に引用され続けてきた。一方で、それらの表象行為の意図は、あくまでもヨーロッパ社会における消費にあったことは再認識しておく必要がある。

食人をめぐる記述・図は、極めて残忍性に満ち溢れたものである。ヨーロッパ社会における表象・イメージの消費という観点からみれば、その残忍性を容易に理解・受容可能な文化的要素が、ヨーロッパの中に存在していたと想定することが可能である。それがなければ、リアリティーに富んだ記述・図化も、到底なし得るはずがない。本発表では、新世界の食人表象を整理・確認した上で、その表象の源泉が、ヨーロッパの処刑文化にあるという新たな考察・解釈を提示する。